津田仙　ぜん　洋学者、農学者。天保八年七月六日下總國佐倉城下天神曲輪生れ、明治四十一年四月二十四日歿（一八三七―一九〇八）。幼名千也、のち仙蘭・仙也、津田德とも署す。號學農、學農山人。佐倉藩士小島善右衛門の四男、嘉永二年元服後櫻井家の養子となるも安政三年離籍、文久元年七月田安家の家臣津田大太郎（榮七）の婿養子となった。江戸で手塚律藏の蘭學塾に入った他、伊東貫齋、福地源一郎（櫻癡）、森山多吉郎等に學び、蘭學から英學に轉じて、通辯、飜譯に從事。慶應三年小野友五郎隨員としてアメリカに渡った折、農法を見聞。明治六年ウィーン萬國博覽會に庭園植物主任兼審査官の資格で赴く。翌年オランダの園藝家ホイブレンクの農法書を譯し、『農業二事』全二冊（五月刊）と題して出版。九年農學校學農社を開校し、『農業雜誌』を創刊。十一年青山學院の前身となる耕教學舍を創立した。十三年小崎弘道、植村正久、井深梶之助、田村直臣等によって組織された日本基督教青年會の機關誌『六合雜誌』の誌名の名付け親となる。他に盲啞教育、禁酒運動にも盡力。女子教育家津田梅子の父。

著書に『酒の害』（七版・明治二十一年五月十一日東京婦人矯風會）。

また津田昇編『津田仙翁略伝』（昭和二十二年刊）、都田豊三郎著『津田仙―明治の基督者』（昭和四十七年十一月私家版）がある。